

## 沖縄県今帰仁城の建築群創造復元と一連の研究のまとめ

### 三上訓顯

中世琉球において、今帰仁城も琉球王朝成立前に覇権を競っていた頃に建造された按司達の巨大城の1つである。これまでの一連の本研究において扱った巨大城は、浦添城、勝連城、中城城、座喜味城であり、建築学あるいは文化財科学の立場から建築群創造復元を試論として論じてきた。

建築群創造復元をしてゆく資料は大別して2つある。先ず発掘調査による遺構や出土品資料。これらから中世琉球時代に中国や東南アジア諸国との海外交易の足跡をうかがい知ることができる。もう一つは空間量である。城壁の発見によって往事の城壁が復元され現代に至っている。こうした城壁によって形成される空間量もまた往事の空間規模であり、建築群を読み解く鍵である。本稿では、これら2つの資料をもとに今帰仁城を対象とし、現時点で想定できる15世紀前半の建築群創造復元を試みると同時に、これまでの一連の研究の総括をおこなった。

キーワード：中世、琉球、今帰仁城、城郭跡、創造復元、文化財科学

#### 1. はじめに

本稿では、建築学及び文化財科学の立場から、中世琉球時代に城壁内に存在した建築群を、発掘資料と城壁の空間規模（以後空間量と呼ぶ）の2視点、及びこれまでに研究が進められてきた首里城建築群の史料を加えながら、世界文化遺産の一つである今帰仁城の建築群創造復元をしてゆくことが研究目的である。

従って現時点で私達が到達できる建築群創造復元の姿であり、今後新たな史料が発見されれば、ここで述べる建築群の姿も変わってゆく可能性を持っている。そうした点で建築群創造復元は、これまでに明らかにされた研究史料にもとづいた仮説の1つといえる。

研究方法は、建築群創造復元は首里城建築群の機能をMaxの完成形と捉えれば、これから施設機能を低減する方法で今帰仁城施設の機能設定をおこなっている。さらに建築群創造復元に際しては、沖縄県の歴史・風土及、民家の建築構造（注1.2.3.4.5.6.7.8）、さらに発掘調査資料にもとづいている。

こうした歴史・風土と、城郭としての防衛機能を保持しつつ、海外交易を盛んにおこない、地域を治め、城主達の生活拠点空間として成立するためには、どのような建築

群であれば良いかを探ることにする。

これまでの考古学では空間からみた考察は、あまりなされてこなかった。しかし城壁が示す空間規模（以後空間量と呼ぶ）は創建当時の大きさをあらわしている。したがって文献や出土品と同等の意味合いを空間はもっている。当然これまでに研究されなかった視点で未知数ではあるものの、当時の建築群が空間構成上どうであったかについて建築学あるいは文化財科学の立場から考察してゆく。

現代の文化財科学は、従来からの考古学、材料学、建築学といった諸分野の学際的立場から追求する学問分野であ



図-1. 現在の今帰仁城 (2017年筆者撮影)

り、私達が知り得た知見を、空間的、あるいは視覚的に示してゆくことも学問上の意味を持ってくる。

1980年から2008年までのあいだで、今帰仁城跡及び周辺遺跡の調査がおこなわれ史跡整備事業等に伴う発掘調査38事業、今帰仁城趾周辺遺跡の発掘調査報告17事業ある。本稿で依拠した文献は城郭内の発掘調査報告書(注9.10.11.12)に依拠している。

2. 今帰仁城の立地と歴史

今帰仁城郭現住所は沖縄県国頭郡今帰仁村今泊、間近に海を望む丘陵の頂部に立地している世界文化遺産である。図2では、現在の都市地形図(注13)に基づく等高線と復元された城壁の位置を示した。城壁内の各郭は、主郭が標高106m前後に位置し、この南東側20mほど下がったところに志慶真門郭(しまかもん)、他方本殿北西側に大庭(うーみや)、御内原(うーちばる)が正殿とほぼ同じ標高で位置している。さらに標高15mほど下がった位置に大隈(ウーシミ)郭やカーザフ郭が位置し平朗門がある。さらに平朗門の北西方向を外郭と呼び、当時の今帰仁集落の一部が存在していた事が先の文献(注9)からわかる。これらを含めて今帰仁城の空間を構成している。復元された城壁は、これらの城郭を仕切るように設けられており構成も少し複雑である。

次に今帰仁城の概略史を示したのが表-1(注10)である。

現時点で今帰仁城の歴史をこの文献から抽出できる記述は少ない。この表から読み取れるのは、13世紀末頃築城が始まり、14世紀中国の司書では、沖縄本島北部を治めていた「怕尼芝(はにじ)」、「珉(みん)」、「攀安知(はんあんち)」の三王の拠点として沖縄本島北部を支配下におき中国と交易おこなっていたと記載されている。こうした交易を行いつつ中世琉球の三大按司の一つ北山王として今帰仁城は興隆を極めていた。

そして首里王朝成立後の1416年中山王尚巴志によって北山王統は滅ぼされ、以後沖縄は首里の琉球王朝に国家統一されるわけであるが、そうした過程で登場した中世巨大城である。城郭の規模は約4ha、首里城と同規模といえる。

1416年の北山王統滅亡後、城は1609年の薩摩侵攻まで城は存在していたが、正殿の建築が廃築や移設などの変更がなされていることから、本稿では北山王統最後の頃、すなわち1416年頃を建築創造復元の対象とした。

3. 今帰仁城の遺構・遺物について

まず主郭である正殿の遺構が発掘されている。発掘調査報告書(注14)でみてみよう。主郭の層序は、遺物を包含した堆積層と整地による造成層から成立し、両者の繰り返しによって明瞭に確認できる層序が検出されており発掘調査では希有な事例とされている。ここでは10層が確認され、その内4層が造成層とされている。こうした遺構調査結果



図-2. 現在の今帰仁城地形図(等高線45m以上を図示)

表-1. 今帰仁城史

今帰仁城の歴史	関連する歴史
13世紀末築城 今帰仁城の土地に人がすみ着き始める	鎌倉時代 1336
1314 沖縄本島は北山、中山、南山の3勢力に分かれる。 1322 怕尼芝(はにじ)、中北山を滅ぼし北山王となる。	
1383 山北王怕尼芝、明国に使者を派遣し交易を行う(6回) 1395 山北王怕尼芝、明国と交易を行う(1回) 1396 山北王怕尼芝、明国と交易を行う(11回) 1400 明実録によると、怕尼芝(はにじ)・珉(みん)・攀安知(はんあんち)の3代の王統33年間に18回の朝貢がおこなわれた。	
1416 攀安知(はんあんち)、尚巴志に滅ぼされる。 1422 尚巴志、次男の尚忠を今帰仁監守として派遣する。 1429 南山王が中山に滅ぼされ、三山が統一される。 1440 山北監守尚忠が尚巴志を継いで王に即位する。 1440 尚忠を継ぎ弟の具志頭王子が北山監守説がある。 1469 第一尚王統が滅び、北山第一監守も離散する。 山北監守に大臣を交代で派遣する。 1490 尚真王第三子の韶威を北山監守に派遣する。	1406. 首里王統一  室町時代 首里王朝
1609 薩摩軍の琉球侵攻で今帰仁城は焼き討ちにあい、克社死亡する。その頃、今帰仁村と志慶真村が城下に移動したため、今帰仁城内にいた北山監守(今帰仁按司)も城下へ移り住む。	1573 徳義安山王 1603
1665 北山監守(今帰仁按司)は首里に引き上げる。	江戸時代



から、今帰仁城の存在経緯は4期に分類されてきた。

第1期は第9～8層が該当し、今帰仁城初期の頃であり傾斜地を土留めし石積みや柵を築き、掘立建築物の柱の跡や柵を巡らせて城を造成してきたことがわかっている。

第2期は5～6層が該当し、14世紀前半から中頃、現在の城壁にあたる石垣が登場している。城壁内に高さ1mの石積みによる基壇を有する建築が建てられていたことなどがわかっている。

図-3は、発掘された遺構に基づき建築柱間を図示した。柱間はX方向約2.4m、Y方向約2.2mと計測できる。本殿は基壇と袖壁を有するx方向5間、y方向4間の規模の大きさ

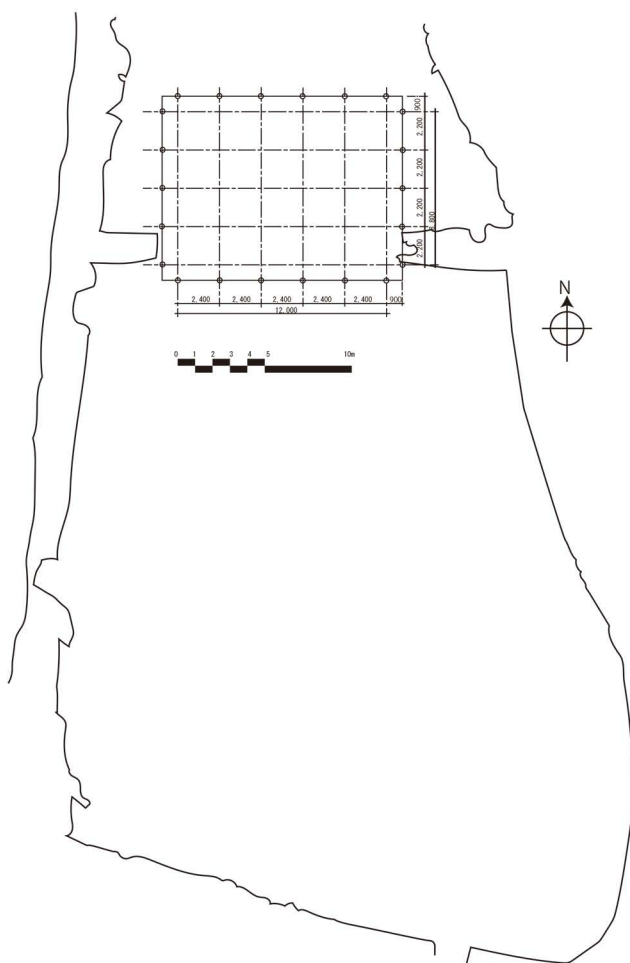


図-3. 本殿遺構発掘結果 (注9よりトレース)

であり、基壇外周の柱は下屋、あるいは裳階があったと考えられている。

第3期は第2層が該当し、14世紀後半～15世紀前半の中国陶磁器が大量に出土していることが発掘調査報告書に記載されている。

第4期は15～17世紀にわたる地層であり、正殿跡とは異なる後世の時代の建築遺構である。これは今帰仁城城主滅亡後の北山監守のために設えられた建築であったと説明されている。

こうした遺構を時系列で見ると、北山王は1416年に尚巴志に滅ぼされていることから、第1期～第3期までが北山王が居住していた頃の城とみられる。本稿で第3期を建築群創造復元の対象としている理由である。

12～13世紀頃の正殿跡は発掘調査報告書(注9)により確認されており図3で示した。正殿は通り芯寸法で東西方向12m、南北方向8.8mが確認されており、基壇部分は東西13.8m、南北10.3m、高さ90cmと測定されている。さらに基壇部分に複数の小柱の礎石群が確認されている。これらのことから正殿は縁側状の空間あるいは雨端を設えていたと考えられる。さらに正殿左右の側面に袖壁の遺構がみつかり、これは座喜味城と同様の手法である。正殿を介して空間を仕切りたかったとする意図があった。

主郭は正殿の遺構だけが発見されており、前面がオープンな空間になっている。ここは御庭と呼ばれる空間であったと本稿では推測している。

さら発掘調査による出土品は大変多く、ここでは外郭IV地区に限っての遺物出土品表(注12)から、13世紀後半～15世中頃と時代推定できる出土品だけを抽出したのが表2である。A)はI層、B)はII層がこの時代に該当する出土品破片数である。青磁、白磁、青花、褐釉陶器、タイ陶器、ベトナム陶器、南西諸島陶器などが出土するのは、勝連グスクや中城城と同様である。出土したI層、II層の破片数小計とこの外郭IV地区の全出土遺物数との百分率をみると過半の出土品が、この時期のものであることがわかる。また推定個数は破片を組み合わせた場合の個体数である。特に

表-2. 外郭IV区出土遺物集計表 (注12)

外郭IV区出土遺物	青磁・碗	青磁・皿	白磁	青花	褐釉陶器類	タイ陶器	ベトナム陶器	南西諸島土器	石器	玉類	銭	金属製品
A) I層出土破片数	2,356	306	938	985	170	130	17	315	82	44	27	295
B) II層出土破片数	1	0	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0
C) :A)+B)の小計	2,357	306	939	997	170	130	17	315	82	44	27	295
D)全体の破片少数	3,967	582	1,412	15,648	310	267	37	492	171	163	80	678
推定個体数	2,726	468	676	921	246	114	17	297	-	-	-	-
C)/D)百分率	59.42	52.58	66.50	6.37	54.84	48.69	45.95	64.02	47.95	26.99	33.75	43.51

中国や東南アジアから輸入された陶器類が多く、往事の活発な海外交易の様相がうかがえる。そして建築部材である瓦屋根の破片は、全く出土しなかった。つまり屋根は板葺きか茅葺きであったと考えられる。

#### 4. 正殿建築意匠の創造復元

前述の発掘調査報告書をもとに主郭・正殿の建築意匠復元をおこなったのが図4である。通り芯の寸法は、間口5間（約12m）、奥行4間（約8.8m）である。この柱間から判断すれば既に今帰仁村で描かれている想像図（注15）のように2階建も可能であるが、海に隣接する立地、偏西風や台風時の暴風雨といった気象条件を加味すると、本稿では平屋建てが適切だと考えた。また出土品から当時の瓦類が全く発見されていない事から屋根は板葺きか茅葺き。屋根勾配は沖縄民家同様に10/10勾配とした。これにより建築の高さが決まってくる。さらに建築外周部に小柱発掘跡から雨端と呼ばれる沖縄地方伝統の設えがあったと考えた。従っ

て軒先を人が通過できる最小高さ寸法1,700mmを設定すると階高は2,730m以上必要になる。

さらに基壇部は高さ900mmの土塁上に築かれていることがわかっている。通例の工法では土塁端部に柱を設けることはなく、土塁内部にあったと考える方が自然だが、ここでは発掘された状態で意匠化している。さらに正殿の壁は首里城建築群同様に木造であると考えた。

また本殿側壁両側に石造の袖壁が接している。これは座喜味城正殿同様に空間を仕分けようとする意図が伺える。建築学の見方をすれば袖壁によって公私のゾーンを仕分ける設えとも考えられる。

以上の考察を踏まえれば、周囲に雨端を設えた平屋の木造和小屋組の構造が読み取れる。

内部は御座所があったと考えられ図示した大きさから、正殿中央部で間口方向一杯に設えられていたかの2通り考えられる。ここでは前者の設えとしている。

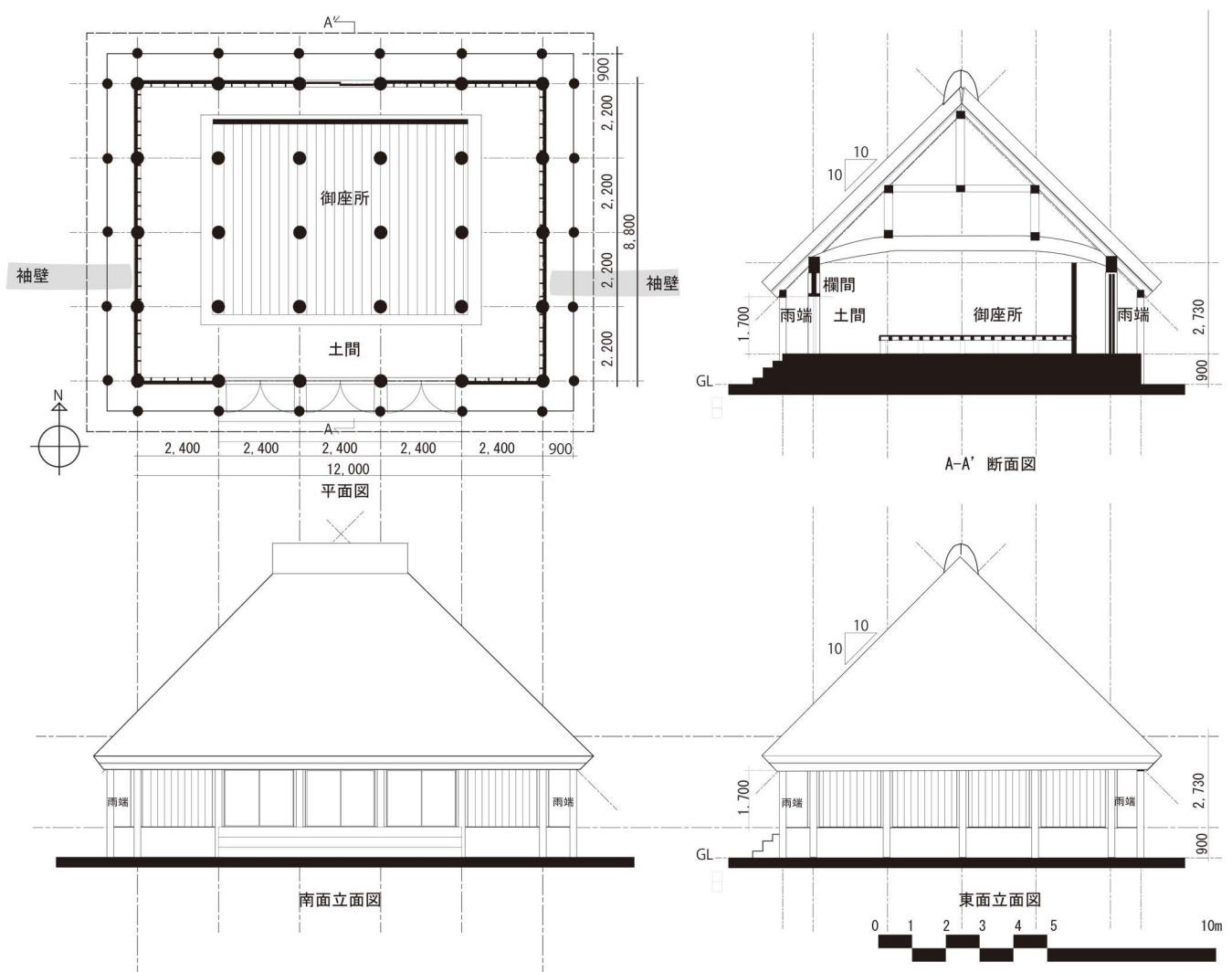


図-4. 正殿建築復元図



5. 建築群の各施設機能の検討と配置について

首里城建築群を琉球城郭最後の完成形とみなせば、施設機能は最大使途が設定されていると考えた。これから低減法により発掘調査報告書の記述を参照しつつ、各城郭の施設機能を評価しながら構成していった。この方法は本稿で一貫して採用しており、今帰仁城建築群の施設機能の構成も同様である。表3は首里城の施設使途に対して、本稿でこれまでに扱ってきた城郭の施設機能の評価を記したものである。これに今回の今帰仁城の評価を加えた。

今帰仁城は、本殿、書院、二階殿、料理座や大台所の機能は存在していた。さらに発掘調査で王妃の空間が推定できることから御内原の名称が登場する。従って王妃居室である黄金御殿(クガニウドン)や王妃の雑用をおこなう佐敷殿、女官室が存在していたと考えられる。また城郭内に祭祀の設えがみられることから、御内原を管理する世添殿としての使途も伺える。

ただし城郭の空間量からみると、これらの機能毎に施設が建てられていたわけではなく、一つの建築に複合された場合もあったと考えられる。

さらに城郭が行政として地域を治めていたことから、近習詰所や奉行詰所、番所、銭蔵、金蔵もあったとみられる。また貨幣などの金属類が出土されていることから鍛冶

屋、自然信仰の祭祀の場も城郭内にあったと考えられる。

このほか城壁で区切られた各空間は、発掘調査報告書で発掘時の知見が述べられており以下にこの要約をあげる。

「主郭(本丸跡)翼廊のある基壇や建築工法の跡がみられる。志慶真門跡は曲線を描いた石壁は原型を留め、遺構から掘立柱の遺構が複数確認され、武家屋敷の跡が確認される。大庭は城内で行われる催事の間。御内原は今帰仁城で使えた女官達の生活の間。カーザフ郭は主に水場。大隅郭は馬の骨や歯が大量に出土していることから武術訓練の間とみられる。」

志慶真門跡は本殿南東側に突き出し城壁で囲われた空間であり、大庭からのアクセスができる。この敷地は海に向かう傾斜地であり、複数の建築遺構が確認されている。間口奥行方向ともに通り芯の軸上にはなく乱雑な柱配置であることから、後に柱補強などをしたことがうかがえる。遺構から建築構造を読み取ると、当時の琉球民家の形状に近い。出土品もこの門跡から数多く発掘されており、当時の生活を反映したものか、あるいはこの場所にうち捨てられたかはわからない。従って海からの防御のため、あるいは側室の住まいなど使途は諸説あるが、琉球民家様式建築群が複数存在していたことはわかる。

大庭は城郭内催事の間とされているが、それが自然信仰

表-3. 各施設内容の検討

首里城施設内容	使途	可能性評価				
		浦添城	勝連城	中城城	座喜味城	今帰仁城
正殿	王を中心とする祭祀がおこなわれた聖域空間。	○	○	○	○	○
北殿	摂政、三司官が重要事項を審議する場所。冊封司の接待の場所。	×	×	×	×	×
奉神門・納殿	平時は薬、茶、煙草などを取り扱う。神女達が神をもてなすところ。	△	×	×	×	×
黄金御殿(クガニウドン)	王や王妃の居室。	○	○	○	×	○
近習詰所	行政に関わる官人などの詰め所で番所に隣接。	○	○	○	×	○
南殿	通年で日本式の行事がおこなわれた場所。薩摩の役人の接待所。	×	×	×	×	×
番所	行政施設の玄関、取り次ぎ、南殿と隣接。	○	○	○	×	○
鎖の間	王子らが薩摩の賓客や知人を接待したところ。	×	×	△	×	×
書院	王が日常政務、行祭事、冊封司の接待場所としても使われた。	○	○	○	○	○
奉行詰所	官人、奉行役人などの詰め所と推定。	○	○	○	×	○
二階殿	王の日常の居室や寝室。	○	○	○	○	○
寄満(ユインチ)	王や家族の食事所。	○	○	○	×	△
世添殿(よそえでん)	御内原を管轄し、王夫人の住居。	○	×	×	×	○
世諱殿	王が死去した際の継承者が即位の礼を受ける。	○	×	×	×	×
女官居室	御内原に勤める女官達の居室。	○	○	○	×	○
西の当蔵	不明。	×	×	×	×	×
廊下	正殿と北殿や南殿をつなぐ。	△	×	×	×	×
寝廟殿	王死去の際の霊柩安置所	△	×	×	×	×
料理座	儀式的料理や使者、官人などの饗宴の料理を調達したところ。	△	△	○	○	○
大台所	賓客の料理や、米、砂糖、漬物などを取り扱っていた。	○	○	○	○	○
佐敷殿	王妃の諸用を扱うところ。	×	×	×	×	○
銭蔵	金銭、酒、壺類などを取り扱った。	○	○	○	×	○
金蔵	銭倉同様の蔵だったと推定した。	○	○	○	×	○
系図座	士族の家譜や王府の書類編集に関する業務をおこなう。	×	×	×	×	×
用物座	中国や日本との貢物を取り扱う。	×	△	○	×	△
鍛冶屋	首里城には存在しない。	○	○	○	×	○

○:存在、△不明、×存在しない

による祭祀の場、海外交易による賓客接待の場などに使われたのであろう。発掘調査報告書では北殿と南殿の遺構を確認している。

また大隅郭は馬術訓練の場であることから、馬場と厩舎や世話する家臣達の住居程度は存在したと考えた。

以上の考察にもとづいて作成した配置図・建築群創造復元が図5である。

配置図全体からみると、各施設の用途毎に城壁で明確に仕切られている点が今帰仁城の特徴だといえる。また発掘調査報告書を見ると外郭及びこの外部に集落が隣接して存在していたとされ出土品も数多く発掘されている。城と城外との関係性の高い空間利用のされ方が伺える。

城郭内をみると主郭に隣接して御内原があり、ここに女官居室があったとする発掘調査報告書の知見に従えば、御内原を管轄し王夫人の住まいである世添殿、王の日常の居室や寝室がある二階殿、さらには王妃の所要を扱う佐敷殿、王や家族の食事場所である寄満（ユインチ）を配置してみた。

御内原の建築規模を探ってみたのが図6である。柱間の寸法を1間（1.82m）のモジュールとする施設構成を想定した。王の日常居室である二階殿は表座と裏座の空間を設けることができ、表座は12畳の居室を2部屋設けることができる。次の間や琉球民家固有の縁側や雨端を設けて必要な施設が配置できる空間規模であることがわかる。

同様のモジュールで王や家族の食事処である寄満（ユインチ）とこれに付随するであろう台所も設けることができる。さらに王夫人の住まいである世添殿や所用を行う佐敷

殿が加えられる。また御内原に勤める女官居室の施設も配置可能である。これらの建築群構成で御内原に十分収まる空間量であることがわかる。

このように建築群施設を配置してみると、王家の日常生活の用に供する用途は、御内原の空間量で十分満たされていたと考えられる。

大庭に目を転じてみてみよう。大庭では北殿と南殿の遺構が確認されており、海外からの冊封司の接待、あるいは祭祀や催事が日常的におこなわれていた関係から、書院などが設けられていた空間である。出土品から中国陶器やベトナム陶器が多く発見されていることから、当時の盛んな海外交易の様相が伺える。

こうした接待と関連性があるのが料理座である。饗宴などがおこわれた大庭に料理座があることには機能上の合理性をもつ。他方で料理座は水場であるカーザフ郭に隣接す



図-5. 配置図・建築復元図

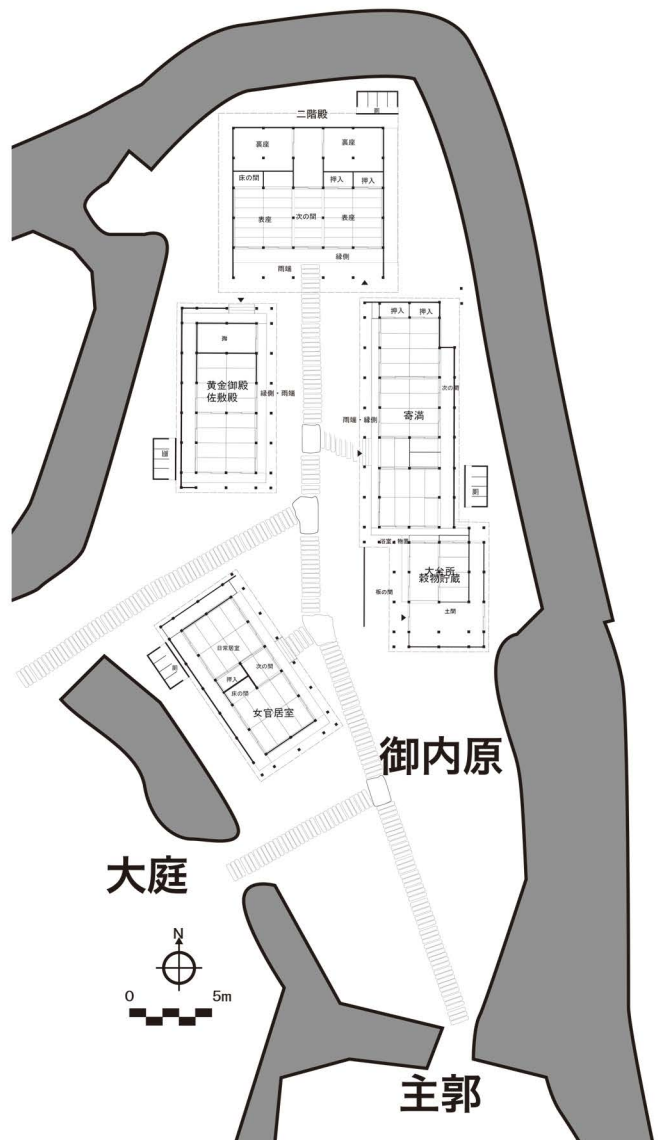


図-6. 御内原の検討



る考え方もできる。しかし大庭から平朗門にいたる長い急勾配の動線の先に料理座が設けられる可能性は機能的とはいえない。地形図をみると建築が建てられる場所は限られており、こうした空間に料理座を設ける必然的理由はない。ここはむしろ近習詰所や番所などが設けられる位置と考えた。従って本稿では南殿に隣接して料理座が設けられたと推定している。

このように考えてくると今帰仁城は、本殿、御内原、大庭の3城郭で、王家の宮廷として日常の生活の諸々、そして中国や東南アジアとの活発な海外交易、これに伴う人々の往来や接待、あるいは自然信仰の祭祀といった機能が城壁に仕切られつつ隣接してまとまっていたと考えられる。

#### 7 今帰仁城の3DCGについて

前章の検討に従い図5の配置図をもとにし、3DCGによる視覚的空間としてあらわしたのが図7である。

今帰仁城郭は城壁が細分化されて設置されており、本殿や御内原といった施設機能毎に城郭で仕切るなど、施設機能毎にゾーニングをする設え方が特徴である。

建築の創造復元の結果いくつかの気づきをあげておく。まず城壁の規模(注16)に対して建築群の古来から採用されている柱間寸法や屋根などのディテールや寸法の小ささがある。さらに本稿で想定しうる施設を入れても尚空間量は余る。おそらく王宮としての設えや城としての防御、あるいは祭祀を考慮すると、さらに倉庫や祭祀の空間などが

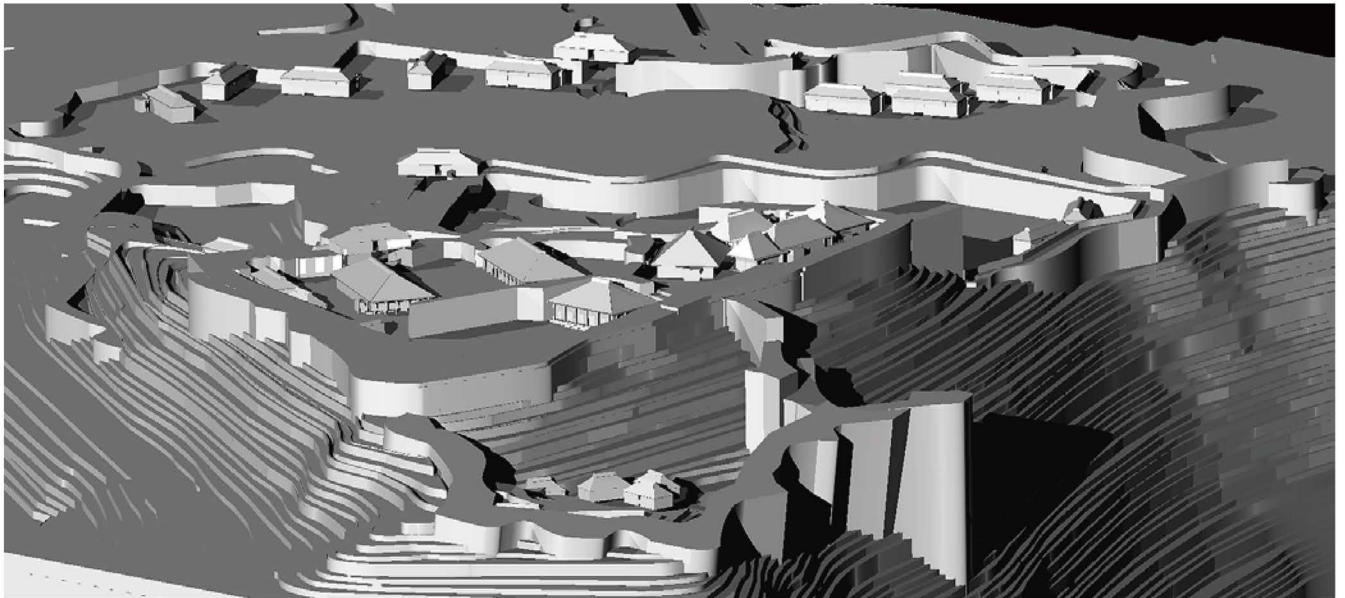


図-7-1. 今帰仁城の建築群復元(南面)

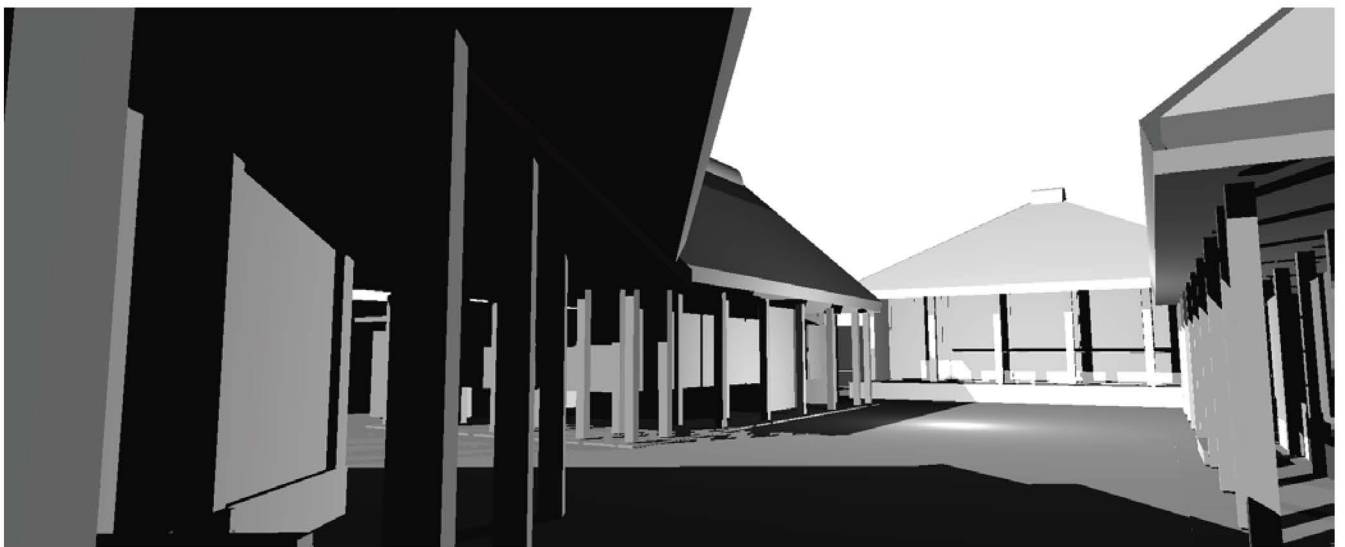


図-7-2. 御内原の建築群創造復元

設けられていた可能性はある。また近隣の村の一部が城郭内に取り込める空間量であった。

### 8. 継続研究のまとめとして

本稿も含め、これまで首里城を除く沖縄県巨大グスク5城（浦添城、勝連城、中城城、座喜味城、今帰仁城）の建築群創造復元を試みてきた（注17.18.19.20）。図8に本稿で扱った5城のゾーニング概念図、図9で各城の建築群創造復元による城郭の姿をまとめた。さらに図には比較対象として首里城を加えた。これらを用いて、これまで論じてきた5城の建築創造復元に関する一連の研究テーマのまとめとしておく。

建築群創造復元を行ってきた基本認識として2点ある。先ず城壁の位置は城郭創建時を示しており、城壁によって囲まれた空間量も創建時のものであることが前提にある。従って歴史や遺構・遺跡と同様に、空間も歴史解明のための素材として扱うことができる。

次いで、城郭内建築群施設の機能や用途は、防衛上の機能の他に、地域を統治し、海外交易をおこなってきた経済面での公的機能があり、さら王宮としての暮らし方である私的機能もあったはずである。こうした公的空間と私的空間が城郭内に空間構成原理に従って併存していたと考えている。このように空間を視覚的に表現する事は、今の時代の知見を統括し、あり得べき姿を試論として視覚的に提供しており、それは文化財科学の方法の1つになりえる。

次に5城の空間上の知見を統括しておこう。

先ず浦添城は、建築遺構が発見されておらず城壁全体の位置は推定されているが復元は一部にとどまっているため、今後も発掘調査により新たに発見がなされる可能性がある。現時点で着目したのは、城郭内を二分する6mのグランドレベル差である。本稿ではこれが、公私をわける空間上のよりどころと考えた。これを手がかりとして建築群創造復元をおこってきた。

また勝連城では一の郭と二の郭のグランドレベル差が約10mあり、二の郭の正殿遺構が発見されている。これらを手がかりとすれば城郭の最奥一の郭に私的機能が凝縮され、二の郭の正殿を経て三の郭の公的機能へとリニアに続いている空間構成が考えられる。建築群の配置を考える上で示唆的な城郭であり、公私を分けたゾーニングが比較的容易に読み取れる空間である。

中城城では最も面積の大きな一の郭に私的機能、正殿、公的機能の一部が設けられたと考えられる。その論拠にできるのが一の郭に設けられた高さ1.2mのグランドレベル差

である。このレベル差の位置に正殿を設けると、正殿背後にまとまりをもった私的空間を配置できる空間量である事がわかった。そして二の郭、三の郭に公的空間や馬場などが設けられていたと考えられる。

規模の小さな座喜味城では、正殿の建築遺構が確認されている。特に正殿と城郭をつなぐ側壁の袖壁遺構も発掘されている。このことは当然防衛上の要請から来ていること

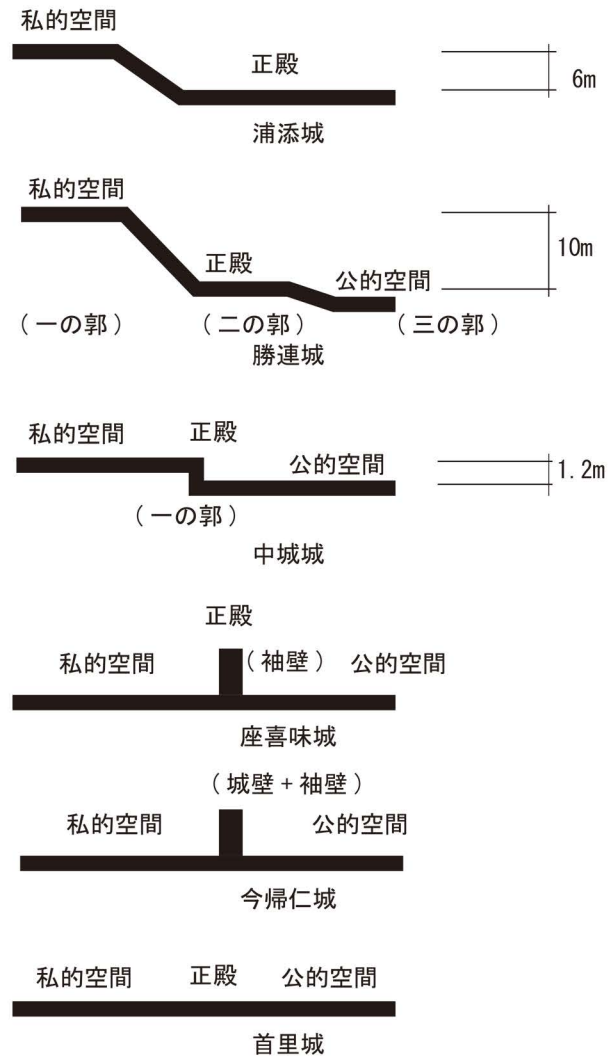


図9A 断面ゾーニング概念



図9B 平面ゾーニング概念

図-8. ゾーニング概念図



注釈

依拠地形図は以下の通り。

浦添城：旧日本軍作成地形図

勝連城、中城城、座喜味城：米軍作成地形図 (feet 表示)

今帰仁城：世界文化遺産登録時の都市地形図

そのため図版に若干の相違がある。

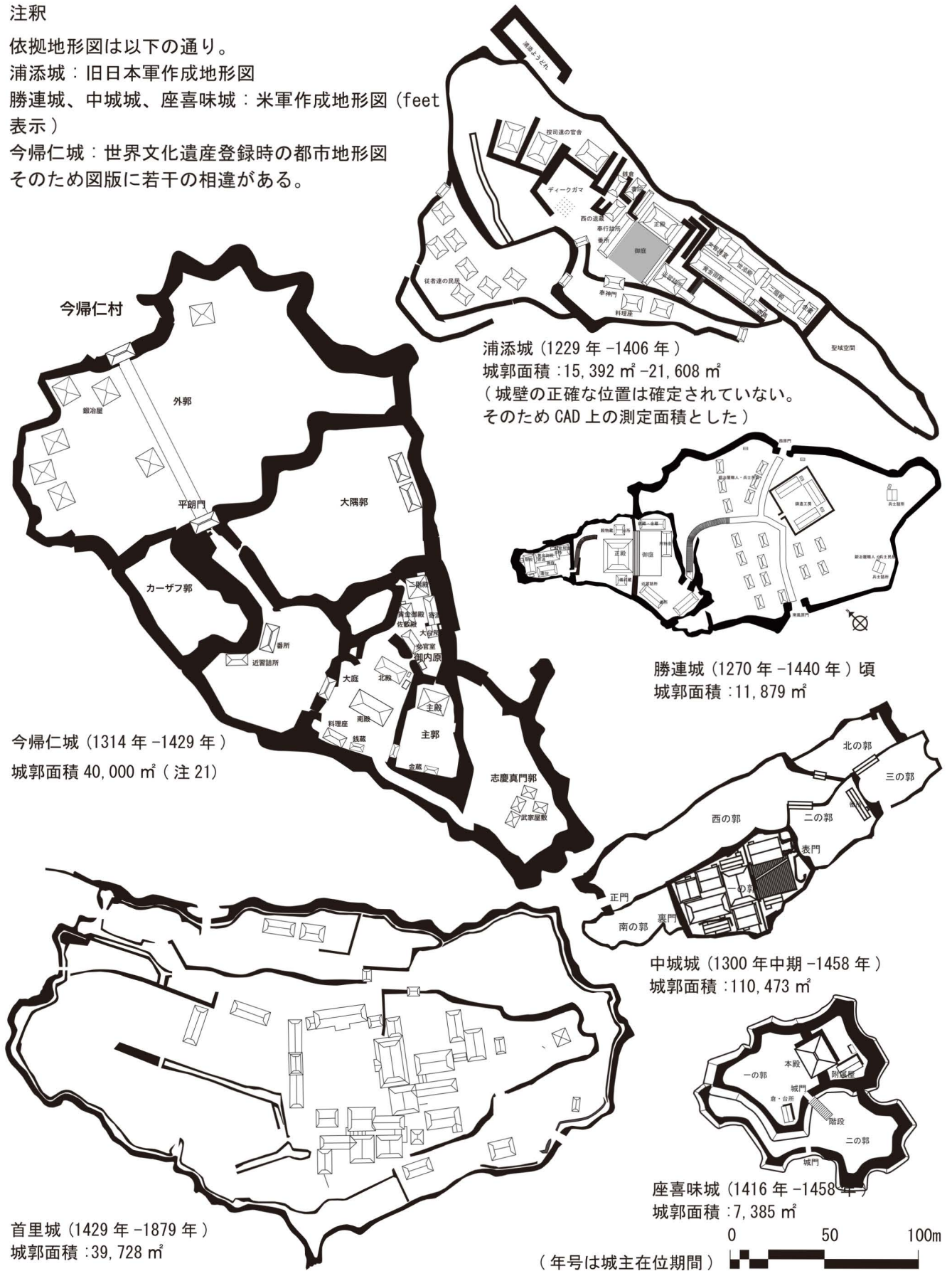


図-9. samascaleによる城郭の比較

もあるが、空間でみれば正殿を軸に公私の空間を仕分けようとした痕跡と理解できる。

これらに対し今帰仁城では、城壁によって御内原と呼ぶ私的空間と大庭と呼ぶ公的空間とが正殿を軸に放射状に結ばれており、正殿を軸に御内原が私的空間、大庭が公的空間であり、これらは城壁で仕切られている点が特徴である。正殿を軸に片方の空間を180度回転すれば、前述した城郭のゾーニングと同様になることからゾーニングの形態は他の城郭と類似していると考えた。

参考までに首里城正殿をみれば、その南側に御庭や書院が連なり、催事や冊封司の接待にあたる公的な施設機能が配置され、正殿の東側は、黄金御殿や世添殿、二階殿などの王宮の私的機能が形成されてきた。正殿という建築を軸に公私の空間のゾーニングがあったことがわかる。

以上の知見から、浦添城、勝連城、中城城、座喜味城、今帰仁城は、私的空間、正殿、公的空間と連続する明解なゾーニングが展開していたと考えられる。これが5グスクに共通してみられた現象である。そして公私はレベル差、袖壁、あるいは正殿などの位置によって空間が仕切られていたことがわかる。

これが本稿で扱った琉球5グスクの空間構成原理であると結論づけておくことにする。本稿をもって首里城を除く5城に関する一連の建築群創造復元に関する研究のまとめとする。

**謝辞** 本研究開始の動機付けとなった摂南大学理工学部住環境デザイン学科教授坂本淳二氏、浦添城の研究でヒアリングと資料提供を受けた沖縄県立博物館元館長・沖縄県立芸術大学元教授安里進氏、効率的に資料提供をいただいた沖縄県立図書館郷土資料室、沖縄県公文書館に謝意を申し上げる。

#### 注及び参考文献

- 注1) 田辺泰：琉球建築，座右宝刊行会，1970。  
 注2) 海洋博覧会記念公園管理財団：琉球王府首里城，ぎょうせい，1993。  
 注3) 安里進：琉球の王権とグスク，山川出版社，2006。  
 注4) 當間嗣一：琉球グスク研究，琉球書房，2012。  
 注5) 永瀬克己：沖縄・よみがえる民家と集落，三協社，2015  
 注6) 高倉倉吉：琉球の時代，ちくま学芸文庫，2019。  
 注7) 吉成直樹：琉球王国は誰がつくったのか，倭寇と交易の時代，七月社，2020。  
 注8) 高倉倉吉：首里城を解く－文化財継承のための礎を築

く，勉誠社，2021。

注9) 今帰仁城跡発掘調査報告書1.2 合冊本、沖縄県今帰仁村教育委員会、2009年。

注10) 今帰仁城跡発掘調査報告書3。沖縄県今帰仁村教育委員会2008年。

注11) 今帰仁城跡発掘調査報告書4。沖縄県今帰仁村教育委員会2009年。

注12) 今帰仁城跡発掘調査報告書5。沖縄県今帰仁村教育委員会2011年。

注13) 海洋博覧会記念公園管理財団：琉球王府首里城，ぎょうせい，1993，p156の都市地図をトレースした。

注14) 発掘調査は城郭内外でおこなわれており、本稿で扱った資料は調査報告書の一部である。

注15) 今帰仁村歴史文化センターで展示されている復元図。

注16) 今帰仁城では城壁の復元をする際に土木設計図書が作成されているが現時点では公開されていない。従って今帰仁城城郭3DCG復元では、高さ方向の寸法表現は筆者の現地調査時の目測による。また城壁上部にゆくに従って端部が狭まっており、これも設計図書に記載されているはずだが未公開である。従って3DCGでは便宜上底部の城壁の幅員で立ち上げている。結果として城壁が大きく見える嫌いがある事を申し添えておく。尚自治体保有図面が公開されれば、地盤面の層序を考慮して当時の城壁の高さも推定する事ができる。

注17) 三上訓顯：建築史上の2つの経験，名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要・芸術工学への誘い，vol21，2016，p3-18。

注18) 三上訓顯：沖縄県勝連城創造復元モデルに関する研究，名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要・芸術工学への誘い，vol24，2019，p3-12。

注19) 三上訓顯：沖縄県中城城建築群の創造復元について，名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要・芸術工学への誘い，vol25，2020，p3-12。

注20) 三上訓顯：沖縄県座喜味城建築群の創造復元について，名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要・芸術工学への誘い，vol26，2021，p9-16。

注21) 今帰仁村教育委員会社会教育課の説明によると、今帰仁城郭の面積は算出されていない。文化庁国指文化財登録面積7haで世界文化遺産に登録しているが城郭外も含まれる。本稿ではWEB公式サイト公開の概算面積を使用した。